

寄稿四 仙台藩茶道石州流清水派の確立・

発展に貢献した数奇大名伊達綱村公

仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世 **大泉道鑑**
「政宗公ワールド」プロジェクト理事

仙台藩茶道石州流清水派（当流）を仙台藩内に確立し発展させたのは、当流の茶道頭三世清水道竿（寛文二年・一六六二年～元文二年・一七三七年）である。平成三十（二〇一八）は、当流の発展の過程において多大な貢献をした四代藩主伊達綱村公（万治二年・一六五九年～享保四年・一七一九年）の没後三〇〇年を記念し、その遺徳を偲んで、「綱村公没後三百年遠忌法要」が六月二〇日の命日に綱村公以降の歴代藩主が眠る墓所（大年寺無尽燈）で、厳かにまた盛大に執り行われた。この法要には、筆者も仙台藩志会の一員としてまた、当流の宗家として、格別の敬意と感謝の念を持って参列した。そこで今回、「伊達文化」の中心的存在であり続けてきた当流の発展に寄与した綱村公の偉功について、伊達家の正史として有名な『伊達家治家記録』等の各種文献に基づいて述べる。

一方、四代將軍徳川家綱（寛永一八年・一六四一年～延宝八年・一六八〇年）の茶道指南役となつた石州流の流祖片桐石見守貞昌（石州）（大和小泉藩主 慶長一〇年・一六〇五年～延宝元年・一六七三年）は、徳川將軍家の茶道規格を定めた、世に言う「石州流三百箇條」を家綱に提出した。その後、石州流は全国各藩にも広められ、それぞれ独自に大名茶として発展を遂げて現在に至つている。綱村公は茶道については、まず石州の高弟、茶道頭二世清水動閑（慶長一九年・一六一四年～元禄四年・一六九一年）から指南を受けた。なお、二世動閑は「石州流三百箇條」の註解書『清水動閑註解石州流三百箇條』及び『動閑茶湯書』を著し、仙台藩の茶道を石州流にする基盤を固めた。この両著書に加え、二世動閑筆『淡紙庵之記』及び老中松平康福（浜田藩々主 享保四年・一七一九年～寛政元年・一七八九年）自画贊（自ら書いた書と画）の『片桐石見守宗関居士像』（写真1）の二つの掛軸は当流の「三種の神器」の役割を果してきており、代を繼承した証しとして当流の歴代の茶道頭・宗家の手を経て、筆者に手渡された。

二世動閑没後、綱村公が自らその後継者に指名したのは、実子の清水快閑ではなく、一門で実力が傑出していた馬場道斎、後の三世道竿であつた。道重なり、それを追い風にして文教政策を推進した。初め綱村公は特に儒学の本格的に活躍したのは元禄時代以降で、元禄文化が見事に開花した時期と

振興に力を注ぎ、多くの優れた儒学者を召し抱え、その中で抜きん出た田辺希賢（承応二年・一六五三年～元文三年・一七三八年）に『伊達家治家記録』の編纂と言う大事業を命じた。

ご承知の通り、綱村公は幕府老中稻葉正則（小田原藩々主 元和九年・一六二三年～元禄九年・一六九六年）の息女仙姫（万治二年・一六五九年～宝永三年・一七〇六年）と結婚したため、岳父正則は藩政全般を指導しただけではなく、茶道や仏教に極めて造詣が深かつたため、それらの面でも多大な影響を及ぼしたようである。その後、綱村公の宗教や芸術に対する執着が度を越す事もあつたため、時には正則からもたしなめられた。この記事からも、そのひたむきさを窺がい知る事ができよう。

一方、四代將軍徳川家綱（寛永一八年・一六四一年～延宝八年・一六八〇年）の茶道指南役となつた石州流の流祖片桐石見守貞昌（石州）（大和小泉藩主 慶長一〇年・一六〇五年～延宝元年・一六七三年）は、徳川將軍家の茶道規格を定めた、世に言う「石州流三百箇條」を家綱に提出した。その後、石州流は全国各藩にも広められ、それぞれ独自に大名茶として発展を遂げて現在に至つている。綱村公は茶道については、まず石州の高弟、茶道頭二世清水動閑（慶長一九年・一六一四年～元禄四年・一六九一年）から指南を受けた。なお、二世動閑は「石州流三百箇條」の註解書『清水動閑註解石州流三百箇條』及び『動閑茶湯書』を著し、仙台藩の茶道を石州流にする基盤を固めた。この両著書に加え、二世動閑筆『淡紙庵之記』及び老中松平康福（浜田藩々主 享保四年・一七一九年～寛政元年・一七八九年）自画贊（自ら書いた書と画）の『片桐石見守宗関居士像』（写真1）の二つの掛け軸は当流の「三種の神器」の役割を果してきており、代を繼承した証しとして当流の歴代の茶道頭・宗家の手を経て、筆者に手渡された。

二世動閑没後、綱村公が自らその後継者に指名したのは、実子の清水快閑ではなく、一門で実力が傑出していた馬場道斎、後の三世道竿であつた。道



写真1 『片桐石見守貞昌宗閑居士像』
妙関子(松平康福)自画贊

竿を三世に継承させた経緯については、十世大泉道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』に詳述されているので、それを参照して頂きたい。

綱村公は、元禄五年（一六九二）三世道竿に石州流鎮信派の祖、松浦鎮信（平戸藩々主）元和八年・一六二二年～元禄一六年・一七〇三年）に師事するよう命じた。更に、特別な取り計らいを綱村公が自ら行って、石州没後石州流の第一人者となった石州流宗源派（藤林流）の開祖、藤林宗源（片桐家々老）慶長一一年・一六〇六年～元禄八年・一六九五年）に師事させたので、三世道竿は幸運にも既に高齢に達していた宗源から直接台子伝授を受ける事ができた。

さて、綱村公の治世の『青山公治家記録』の寛文九年（一六六九）三月一

九日条に当時一一歳の綱村公の茶会に関する最初の記述が次の通りである。

於レ 囲茶事アリ。兵部大輔殿、右京亮殿、修理殿宗永、桑島孫六殿入来、
掛軸 虚堂墨跡 茶入 小衝肩 茶碗 花蔓高麗 茶拶 利休 金葉屋志賀 茶入盆 朱盆 茶入 青磁帖

三世道竿が綱村公により茶道頭に任せられた元禄五年（一六九二）以降、茶

会の記事が増加の一途をたどった点が注目される。元禄六年（一六九三）から宝永二年（一七〇五）までの一三年間の綱村公の仙台城及び江戸邸における茶会は、実に一三〇〇回以上も催されている。その冒頭の元禄六年の一〇月二三日条の茶会では、岳父正則の嫡子老中稻葉正通（後の正往）寛永一七年・一六〇四年～享保元年・一七一六年）を招き、伊達政宗公（永禄一〇年・一五六七年～寛永一三年・一六三六年）が徳川家康（天文一一年・一五四二年～元和二年・一六一六年）から持領した名品清拙墨跡が床に飾られた。また、晩年の元禄一五年（一七〇二）に行つた茶会は、驚くべき事に三三六回にも達している。これらの記事からも綱村公が茶道にいかに精進していたか、容易に推察できよう。ところが、綱村公が頻繁に茶会を催しただけではなく、茶道の探求に励み、その奥義を極めた事をよく示す資料が少なからず残されている。

その代表的なものとして、宗源、二世動閑及び三世道竿等の記録や談話を研究して会得する事ができた茶道の精神について記した『数奇秘密相伝』をまず挙げる事ができる。次に、綱村公著『如幻三昧集雜著』に収載されている「茶人説」及び「茶説」がある。これらには、茶人のあり方及び茶道の精神についての考えがそれぞれ述べられている。この詳細についても、『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』に記述されているので、その箇所を参照されたい。なお、歴代の茶道頭・宗家の手を経て、筆者が所蔵している綱村公筆の掛軸（写真2）と併せてこの解説と解釈を次頁に示した。

ここで、綱村公の茶道人生に最も大きな影響を与えた茶道指南役・三世道竿の功績について簡潔に述べる。まず第一に、三世道竿を茶道頭に抜擢して頂いた綱村公の並々ならぬ期待に応えるべく、創意・工夫を凝らしてこの流儀の藝術性、またその完成度を一層高めつつ茶道の奥義を究めて当流を開いた。ところが、この流儀を仙台藩内に確立させただけではなく、全国各地に三世道竿の人脈が形作られた。も広める努力を怠らなかつたため、全国各地に三世道竿の人脈が形作られた。

その中で三世道竿は、徳川幕府の茶道方で重要な役割を果す数奇屋頭（格）の谷村三育（？～宝暦三年・一七五三年）等茶道方に仕えていた茶人に茶の湯伝授を行なつており、徳川家の石州流茶道にも大きな影響を与えていた事実が特に筆者の目を引いた。

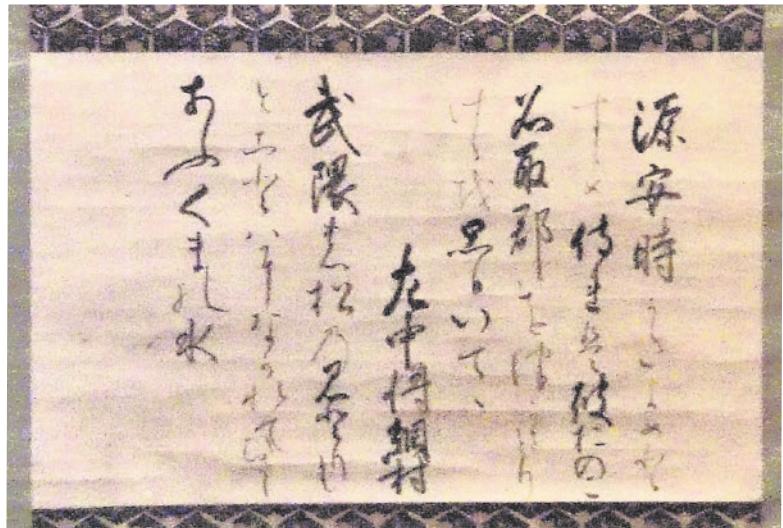


写真2 綱村公御歌及びその解説・解釈 筆者所蔵

ところで、先に述べた筆者が所有している天下一品の掛軸『片桐石見守貞昌宗閑居士像』を入手したのは、三世道竿の後継者の四世清水道簡（享保元年・一七一六年～天明三年・一七八三年）である。この掛軸の自画贊の老中康福の茶の湯の師匠が三育であつたため、四世道簡と三育の共通の師が三世道竿であつたと言う太い絆により、四世道簡が入手できたのではないかと考えられる。ところで、全国の石州流各派の茶道人口の中で、各地の石州流清水派のそれを総計すると、現在でも最も多いと言われている。三世道竿を祖とする清水派が、全国津々浦々へ広がりを見せたのは、この流儀が芸術的に極めて優れていた事だけではなく、綱村公の絶大な支援のもとに、三世道竿の日頃の茶道指導に対する並々ならぬ熱意が見事に結実した結果であると考えられる。

源安時うたよめと
す、め侍れば彼おのこ
名取郡をつかさどり
けるを思ひいで、

左中将綱村

（大意）

松岡安時から和歌を詠んで欲しいと
言われたが、彼が名取郡一帯を司どつ
ていたのでこれに因み次のように詠んだ

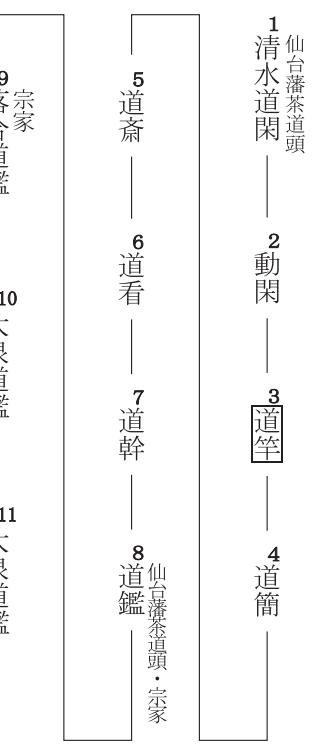
左中将綱村

古来歌に読み繼がれて來た
阿武隈の松は（お前の名の松のよう）
とことはにながれてひさし
あぶくまの水
この地を流れ行く阿武隈川のよう

武隈の松のみどりも
とことはにながれてひさし
あぶくまの水

【解説】十世大泉道鑑

永二年・一五二二年～天正一九年・一五九一年）の理念を重視した茶の心構えに関する茶の湯伝書『道竿拾躰』を著した事を擧げる事ができる。この伝書は、前に述べた二世動闇の著書である『清水道闇註解石州流三百箇條』（『動闇茶湯書』を含む）と双璧と並び称される重要な文献であると学術的に高く評価されている。従つて、当流ではこれを最も重視してきたものである。この内容の詳細については、筆者及び母・十世大泉道鑑（明治四二年・一九〇九年～平成二二年・二〇一〇年）による解説の研究成果が、学会誌『茶の湯文化学』（二十八号）に最近掲載されたので、それを参照して頂きたい。なお、今まで述べた事績に加えて、大崎市にある池泉回遊式庭園の旧有備館庭園、旧阿部家庭園、名取家庭園及び登米市の旧亘理氏庭園は、三世道竿によつて



仙台藩茶道系図(茶道頭及び宗家)

以上述べてきたように、綱村公は清新な氣風がみなぎつた元禄文化を背景に、文教政策を積極的に推進した高度な文化人であった。特に、三世道竿を側面から支えながら生涯こよなく愛して止まなかつた当流の確立と更なる発展に大きく貢献した立役者だつた事は、紛れもない事実である。このようない理由から、綱村公が日本屈指の数寄大名として天下に名を馳せ、また、専制政治に対する批判は多少あるのも事実であるが、仙台藩の歴代の藩主の中で、政宗公に次ぐ名君として今でも人々の心に生き続けている所以であろう。元

造られた遺構である。これらの日本庭園は、色褪せる事なく今に息づく「伊達文化」の貴重な遺産であり、三世道竿の作庭の優れた才能を垣間見る事ができる。これまで述べた数々の業績から、三世道竿は当然ながら当流の流祖(一世)と称してもよいと言われていたが、自らは仙台藩茶道の茶道頭・清水家を継承する者として三世と称したのである(系図を参照)。この芸術的に完成度の高い当流の「雅た侘び」とその真髓は、これ以降歴代の茶道頭・宗家から筆者の代まで伊達家と共に歩み、藩政時代のままほとんど変る事なく連綿として継承してきた。これは極めて稀有な事で、当流はかけがえのない「伊達文化遺産」と言えよう。

参考文献（五十音順）

- 『片桐右見守宗閑居士像』老中松平康福(妙閑子)自画贊 十一世大泉道鑑蔵
- 『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗広、永島福太郎監修 淡交社 昭和五〇年
- 『茶道辞典』桑田忠親編 東京堂出版 昭和四三年
- 『清水動閑註解石州流三百箇條』二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵
- 『清水動閑註解石州流三百箇條 付仙台藩茶道』十世大泉道鑑
- 丸善出版サービスセンター 昭和五五年
- 『数奇秘密相伝』伊達綱村 仙台市博物館蔵
- 『伊達家治家記録』伊達家編纂 仙台市博物館蔵
- 『伊達綱村茶会記』酒井巖 中央公論事業出版 昭和四三年
- 『茶の湯文化学』(二十八号)「道竿拾躰」十世大泉道鑑、十一世大泉道鑑
- 平成二九年
- 『道竿拾躰』三世清水道竿 東北大学中央図書館蔵
- 『動閑茶湯書』(十八冊)二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵
- 『如幻三昧集雜著』「茶人説」、「茶説」伊達綱村 仙台市博物館蔵
- 『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』
- 文化庁・宮城県教育委員会 平成二八年

禄一六年(一七〇三)、綱村公は養嗣子の五代藩主伊達吉村公(延宝八年・一六八〇年～宝曆元年・一七五二年)に後を託して隠居した。享保四年(一七一九)六月二〇日没す。享年六一。法名は大年寺殿肯山全堤大居士。なお、吉村公の茶道指南役と言つ重責も、三世道竿が見事に果した。